

風水の源流及び変遷

——主に陽宅風水に重点を置いて——

陳躍[※]

はじめに

中国の風水に関する研究では、中国より外国のほうが進んで、かなりの成果を上げた、というのが現状である。そこで、一種の責任感を覚えた。今年、出版された渡辺欣雄の『漢族の風水知識と居住空間』にこのような記述がある。「わたくしにとって、気がかりなのは、まず研究者側の知識であり、その点をまず解決しておかなければならない」。これは、ある中国の学者の風水についての発言に対する感想である。これは私の風水の歴史を研究するきっかけにもなった。

風水を理解する上で、その歴史を知る必要がある。筑波大学には『四庫全書』など必要な本もあり、そのうえ、幸いなことに、三十年代に作られた『民俗縦書・堪輿篇』（10冊）もある。短い時間でこの研究ノートができたのはこの十冊本のおかげでもある。

明清まで風水に関する文献が非常に豊富であり、その上ほとんど整理されており、研究に非常に便利である。『五四時代』、中国民俗学会が誕生し、風水についての研究が重視されたが、残念ながら、戦争で資料を整理する段階に留まった。それから今日までこの研究は停滞しているという状態のままで、この時期に書かれた風水の歴史に関する論文は一冊しか見つけられなかった。

風水とは何だろう、二千年の歴史を持ち、その二千年の間で、書き出された風水の本は数えきれないほど多かった。そのうえ、その理論の複雑さ、その理論体系の^{ぼうだい}龐大さから、『四庫全書』のような「正史」に収集された風水書を研究するだけでも、かなりの時間がかかる。そこで、時間と能力の

※鹿兒島大学大学院人文研究所

許す限りで、私は基本的には資料として『民俗縦書・堪輿篇』に基づいて研究することにした。そのうえで、重点を陽宅風水に置きたい。今は陰宅風水と陽宅風水とを、両方研究するには無理があるからでもあるが、それ以上に最初から陽宅風水だけを研究したいからである。しかし、陽宅風水と陰宅風水とは互いに影響し合い、深く関連しているから、ある場合は、陰宅風水をも述べざるを得ない。

第一節 風水の起源と^{ひながた}雛形

風水理論あるいは風水術に別の名称もあり、それは「青鳥術」と「青烏術」、「相宅」と「宅」、^{ひながた}「堪輿」などである。風水の起源及び形成をそれぞれの名称に於いてプロセスとしてたどることができる。陽宅風水観念の起源は古く、伏羲時代にすでに存在していた。その最初の胚胎は、太陽に対する崇拜の信仰から生まれたものであり、その雛形は卜占であった。

一 風水の起源と「^{とり}青鳥」「^{からす}青鳥」の神話伝説

青鳥と青烏は風水の最も古い称であった。

上古時代、中国ではかつて主に太陽に対する崇拜があった。伏羲時代の伝説によると、太陽が鳥であるという。太陽が鳥のように空中を飛んでいるからである。

『山海經』にこのような伝説がある、青鳥は黄帝と西王母の大臣であり、常に黄帝のそばに奉侍していたという。『左傳』にも次のような記載がある、「少昊之國・以百鳥命官・青鳥氏、司君也。」つまり、青鳥氏は天文曆法に関する長官であった。

これらはおそらく太陽は鳥であるという観念からであろう。

「青鳥」について、その典故が『軒轅本紀』にある、「黄帝始划野分州，青鳥子善相地理，帝間之以制經」である。これは三つの可能性がある。①青鳥は人の名である。「相地」が上手であったから、後に上手に「相地」ができるすべての人が「青鳥」と呼ばれるようになった。②青鳥は職の名である。伏羲伝説の中に太陽について「日の中に鳥がある」という説もある。その鳥では別にも称があり、「黒鳥」「金鳥」「三足鳥」という。この伝説は太陽の「黒子」に対する観察の結果であろう。そこで、後に、この方面の専門家は青鳥と呼ばれるようになった。③青鳥と青鳥とはある場合は同じ意味をもつ。馬王堆汝墓に発見された編がある。(図一)「日の中に鳥有り」という伝説にこの絵を加えてこれは後に青鳥と青鳥と互いに言いかえられるようになったからであると伝えられる。

『周易，係辭下』によると、「古者包犧氏之王天下也，仰則觀象於天，俯則觀法於地，觀鳥獸之跡，与地之宜・」この章句は上古時代の人々が天文と地理を観察することを重視したことを表明する。そのうえ、「仰いで以て天を觀す」とは観察するだけではなく、天あるいは太陽の意志を聞き、したがう意味でもある。同じように「俯して以て地を察す」とは大地の意志に聞き、したがう意味でもある。したがって、これはその重視する原因が太陽大地に対する自然崇拜にあることも表明する。青鳥は天を察す専門家であり、青鳥は地を察する専門家であった。これは風水観念の起源は太陽などの自然崇拜に原因があることを表明する。後に「仰いで以て天を觀，俯して以て地理を察す」というのは、風水の二つ特性になっている。

二 最初の風水観念と遺跡

中国の上古時代の遺址の考古研究によると当時、住宅は一般に河・湖に近い、南或るいは東の向きであった。墓は一般に住宅の北にあった。このような訳で、古人は地理環境に対する認識が

あって意志的に住宅の位置を選択していたと言える。その住宅の布局の特性、要するに「水に近い、太陽に向き」というのは、後に風水の原則になっている。風水はいくら変遷しても、この原則は変わっていない。この意味では、風水はすでにその時に芽生えたと言える。

「故に死者は北首し，生者は南郷す。皆其の始めに従ふたり。」注①

「東方は其の気を風と曰ひ，風は木を生ず，南方は其の気を陽と曰ひ，陽は火を生ず。中央を土と曰ふ。西方は其の気を陰と曰ひ，陰は金を生ず。北方は其の気を寒と曰ひ，寒は水を生ず。」注②

「東方は木なり。南方は火なり。西方は金なり，北方は水なり。」注③

これらの理論は「近水向陽」という素朴な発想から変化してきたと考えられる。南或は東の向きという特性は太陽の光りと暖かさを取るためで実際に生活上必要であるが、別に観念的な原因もあった。東は太陽が上昇する所である。南は熱帯で自然に火と関連される。上古時代は太陽と火とは同じ意味で、この視点から見ても、陽宅風水は太陽崇拜から芽生えたと考えられる。

三 風水の雛型一般周の「ト宅」と「相宅」

「我ト河朔黎水。我乃ト潤水東，漚水西，惟洛食食。……俾來以図及び献ト。」注④

これは、周公が都の城を築く前に占うことを描写したものである。『周易』は最も古いト占の本であり、中にト宅に関するト占が大量に記録されている。

それはト宅の最も古い記録である。その時のト占の主な内容は吉凶によって建築の場所、年月日の選択をすることであった。

殷商時代はト占が盛んで、ト宅はト占の一種にすぎないので、後の風水と同一視してはならない。

「孝武帝時，聚会占家問之，某日可取婦乎，五行家日可，堪輿家日不可，建除家日不吉……」注⑤

これは早期の風水がト宅として巫俗の一種にすぎないという状態は後漢まで存続していたということを教えてくれた。

しかし、風水はト宅から変化してきたのであり、ト宅は陽宅風水の雛形、或は初級段階と考えられる。

周朝にも相宅に関する大量な記録が残されている。その時、有名な相宅者は公列という。

「篤公列、既溥既長、既景乃内、相其陰陽、觀其流泉。」注⑥というものである。この描写は公列がどのように相宅するのが反映される。①山水を観察して、建築の位置を選ぶ。②日の影を観察して建築の向きを決める。

「土方氏掌土圭之法以致日景、以土地相宅而建邦国都鄙。」注⑦

東周は殷商より相宅法が多く、「土圭法」「土宣法」「土会法」などがあつた。その内容は公列のとほとんど同じであつたが、卜占的な色彩は殷商のより濃くなかつた。

四 風水の起源について

風水は祖先に対する崇拜の念から生まれたものである。つまり、まず、祖先崇拜から陰宅風水が生まれ、そして、その影響が住宅に及んだ、そこで、陽宅の風水も生まれた。このような考えを持つ学者は少なくない。デ・ホロート氏もこのような考えを持っている。

陰宅風水は確かに祖先崇拜からであるが、陽宅風水が陰宅風水からの変化の結果という考えに賛成できない。まず、陽宅風水は太陽などの自然に対する崇拜から生まれたものだと思う。次に、陽宅はト宅、あるいは相宅からで、陰宅風水はト墓、相墓からであり、それぞれ違う雛形を持った。最後に、『詩経』のような史書の記載により、ト宅はすでに殷商時代にあつたという。相墓は周朝にあつたという記載はあるが、殷商にあつたという記載はない。そのうえ『漢書・芸文志』の相宅と相墓に関する記載によると、後漢以前、相宅は相墓よりも盛んであつたという。これは推察であるが、少なくとも、陽宅風水からだという説を疑う一つの根拠になると思う。

陽宅風水と陰宅風水とは、起源も異なり、それぞれ雛形を持つ。後漢から、陰陽五行学があつて、

その学説の影響を受けて、「陰宅」、「陽宅」という概念がうまれてから、風水として、一緒になつたのではないかと思う。

第二節 戦国秦漢の堪輿

風水はこの時期に大きな転換があつた。この転換を表した標識としては、第一に風水はト占から独立したもので、第二に住宅と墓地の位置から、その吉凶は、現世だけでなく、後世の子孫の幸福にもかかっている、という觀念が初めてはっきり出され、後に風水の主な特性になっている。この転換の原因は当時陰陽五行学と道教が盛んという背景にあつた。

「堪輿」は風水の別の称であり、最初、『淮南子、天文訓』にあつたと思う。『史記』にもあつた。

「堪、天道也、輿、地道也。」注⑧すなわち、堪輿とは天文地理を観察して吉凶を判断することである。

一 陽宅風水

この時期、陽宅風水の著者は『宮宅地形』『堪輿金匱、十四』、『論衡、詰術篇』(王充)、『宅経』である。

(1)「形法」

『宮宅地形』は見失われた。『漢書』のこの本に関する記載によると、その風水理論は「形法」と称されたという。

「形法者、大舉九州之勢以立城郭室舍形、人及六畜骨法之度数、器物之形容、以求其声乞貴賤吉凶。犹律有長短、而各徵其声、非有鬼神、数自然也。」注⑨というものがある。すなわち、「形法」は地形に基づいて、吉凶を判断し、建築の方位を定める方法ということである。

(2)「五行類」

『堪輿金匱』も見失われた。『漢書、芸文志』によると、この本は「五行類」に属された風水理論について、王充の『論衡、詰術篇』に詳しい論述がある。

「凶宅術日、商屋門不宜南向、徵家門不宜北向、則商金、南方火也、徵火、北方水也、水勝火、火

賤金，五行之氣不相得，故五姓之宅，門有所向，向得其宜，富貴吉昌，向失其宜，貧賤衰耗。」という文章がある。

この「凶宅術」の理論の源は，五行の気が互いに育ち，または抑えるという陰陽五行説である。陰陽五行説は，風水に影響を与え，風水の基礎的な理論となった。そこで，風水がト占から独立し初めた。

(3) 風水がト占から離れた原因

漢時代は陰陽五行学説は非常に盛んであった。この学説は哲学であり，宇宙に対する一種の認識でもある。宇宙は，四万，五行，八卦天干，地支，十二次，二十八宿，十二辰などの要素で構成される（図二）という。この図はこの学説の一部分を反映している。風水は，この学説の影響を受けて，十二次，二十八宿など宇宙の要素に基づいて吉凶を判断するようになった。この意味では，陰陽五行学説は風水の方法論といえる。

なぜ宇宙，天，星などの働きに基づいて，人間，住宅などの吉凶が判断できるのかが，「天人感應」あるいは「天人合一」という理由である。つまり「天」と「人」とは一体であるからという。陰陽五行学説は老荘哲学の「気」に関する理論の影響を受けた。老荘哲学における自然の基本素材は「気」と考えられる。「気」とはエネルギーのことである。気はたえまなく流動的な存在であり，重く濁り，また軽く清んだ部分が生ずる。その濁って重くなった状態を陰，澄んで軽くなった状態を陽といい，陰陽二つの対立した状態が生ずるわけである。この状態は相対的なものであって，やや陰，やや陽と区別しているだけである。物を生ずる材料である五行の木・火・土・金・水も流動的な「気」の清，濁の状態によってあらわれるものにほかならないとされている。

「気」は空気のようなものであり，動態的なものであるが，地理は静態的である。そこでいかなる手法によれば，地理のなかにある気のエネルギーをえることができるか，すなわち水や山により「気」をコントロールする風水の考え方が大切になってくるというわけである。

このような天地の構成，万物の生成はすべて「気」から成り立っているという観念は「天人合一（自然と人との合一）」、「万物一体」の思想を生み出した。このため天地の働きは直接人間にもかかわってくると考えられるわけである。これらの思想は風水思想の体系の中で，世界観の部分となったと考えられる。

また，風水の興起が道教思想——それは哲学的な宗教組織であり，人々に対して，人間及びその他の生きとし生ける凡てのものは，自然の絶対的な支配の下にあるのであるから，自分の運命を宇宙の影響に適応させ一致させながら守って行くことを教える思想——の興起とも一致しているという。そこで風水は住宅や墓の位置を決定するに際しては，一切を天にお任せするほどであるようになった。

しかし，風水の「天」は超自然的存在ではなく，人間と同じように「気」で構成された。これは，超自然的存在と交渉する巫俗としてのト占とは異なる。そして「気」は天と人間との媒体でもある。ここの天に任せる方法は，気をコントロールすることで，いわゆる「載気聚気」ということである。風水師はこのコントロールできる専門家にすぎない。これも巫者が超自然的な存在と人間との媒介である巫俗と違う。したがって，この時期に風水が巫俗から独立したと考えられる。

『黄帝宅経』の記載によると，漢代に『宅経』という本があり，その内容が陰陽五行に基づいて吉凶を判断することであるが，ほかには注目すべき特性がある。これは，住宅の位置には現世だけでなく来世のこともかかっているということである。この特性はおそらくこの時期からはっきりしてきたのだと思う。そのうえ，陽宅風水より陰宅風水のほうが，この特性がもっと鮮明である。

二 陰宅風水

(1) 栲里子という人物についてである。この人は風水の歴史において，最初の陰宅風水師であるといわれている。戦国時代に生まれ，亡くなった後，渭河の南，章台の東の間にある場所に埋葬

された。この墓の場所は彼が自ら選び、そのうえこのように予言した。

「后百歳，是当有天子之宮挾我墓。……長東宮在其東，來央宮在其西。」注⑩そして百年後、その予言は現実になった。

(2)『青烏先生的葬經』についてである。この本の作者は青烏といい、漢代に生まれ、本当の名はわからない。彼のこの『葬經』は風水の「祖書」と称された。後に晋代郭漢の『葬書』は風水の經典著書と称されて、今でも使われているが、『青烏先生的葬經』を本にして、『葬書』を書いたと言われている。注⑪

(3) 陰宅風水についての物語。

「初め袁安の父の没するや、母は、安をして葬地を訪ね求めしむ。道に三書生に逢ふに、安の何くに之くかを問ふ。安、為にその故を言ふ。生ら乃ち一処を指して云く、此の地に葬らば、当に世上公と為るべしと。須臾にして見えず。安之を異しみ、是に於いて遂に其の占ひたる所の地に葬る。故に異世隆盛なりしと。」注⑫

以上陰宅風水に関する三つの例をあげたがいずれもこのような特徴があった。風水では墓の位置は、現世だけではなく来世の幸福、榮譽にかかっているということである。初期の風水のこの主要な特徴を重視せねばならない。それは、凡ゆる時代を通じて風水を特徴づけて来たものであり、今日においてもその主要な特徴となっているからである。風水の歴史において、これにも画期的な意義がある。

第三節 魏晋の風水

風水の歴史において、陰宅風水は後漢から盛んになり、魏晋時代はすでに主要な位置に控えられていた。この時期陰宅風水の影響はあまりに大きすぎたので、少なくとも、この時期の陽宅風水は、陰宅風水に従属し、主な理論、方法はほとんど陰宅風水からの変化であったと考えられる。そのうえ、陽宅風水だけではなく、後の陰宅風水もほとんどこの時期の風水理論からの変化にすぎないと言われている。

この時期の風水が、後に、風水の二大流派の基礎を築いたということも注目すべきことである。

「風水」という言葉、晋代の郭漢に初めて使われた。

「葬者，乘生氣也。經曰：氣乘風則散，界水則止，古人聚之使不散，行之使有止，故謂之風水。」（『葬書』郭漢）。

青烏 青烏——ト宅，相宅——堪輿——風水という風水に対する呼び方の変化からも風水の歴史の歩みの跡がみえると思う。

この時期の陰宅風水が、盛んになったのは全て魏の管輅と晋の郭管の役割があったからである。

一 管

「輅，軍に随って西行し，端は丘儉の墓の下を過る。聚に倚って哀吟し，精神樂しません。人その故を問ふ。輅曰く林木茂と雖も形の久しかるべきもの無し。碑誅義なりと雖も後の守るべきもの無し。玄武頭を蔵し，蒼竜足無く，白虎戸を銜え，朱雀悲哭す。四危以て備はり，法は滅族に當る。二載を過ぎざるに其の応至らんとすると。卒に其の言の如し。」注⑬

以上の文章は、管輅がどのように墓の位置に基づいて吉凶を判断したか、を教えてくれた。その方法は、後に「四靈説」と称された。「四靈説」とは、吉をもたらず場所としては必ず以下の条件を満たすべきだというものである。つまり、「朱雀」に面し、「玄武」に背をむけ、右は「白虎」で、左は「青龍」であるという。（図三）この理論は、陰陽五行説の変化であり、漢代の「凶宅術」と相似した。以後、陽宅風水の理想的な様式にもなった。唐宋時期の福建派は、この理論からの発展であったと思う。

二 郭漢

この人物に関する記載が史書に多い。

「郭公なる者有りて河東に客居し，ト巫に精し。璞は之に従ひて業を受く。公，青囊中書九真希を以て之に与う。是に由りて遂に五業天文，ト巫の術に洞く，攘災・転禍に通じて方ぶるもの無き

を致す。京房管輅と雖も過ぎることを能はず。」

注⑭

「初め張裕の曾視の澄、父を葬るに当たり、郭管為に墓地を占ひて曰く、某処に葬らば、年は百歳を過ぎ、位は三司に至らんも、而も子孫は蕃えず。某処なれば年は幾んと半ばを減じ、位は裁に郷校なるも、而も累世貴顯ならんと。澄乃ち其の劣処に葬る。位は光祿、年は六十四にして亡ず。其の子孫は昌を遂げたりと言ふ。」注⑮

郭漢の主な著作は、『青囊海角經』と『古本葬經』で、后者はまた『葬書』とも呼ばれ、風水に於ける經典と承認されている。

郭璞の主な理論についてである。

(1) 氣 (図四、図五)

山や川も形を持つもので、その源は形を持っていない氣である。山の氣は剛で、水の氣は柔であり、二者の調和する場所は吉である。これは葬地を選択する原則である。風水の基礎理論として、「氣」の説、陰陽五行学が受け継がれていたが、郭氏の理論に、山、川と関連され、具体化された。この特徴は重視すべきである。唐宋時代の主に山と川の形勢を見極める「江西派」は、この理論からである。

(2) 山の形勢について

「勢如万馬、自天而下、其葬王者、勢如王浪、重岭疊嶂、千乘乃葬、勢如何降厄、水云从、爵祿三公、勢如何重屋、茂草齊木、升府建国、勢如倬蛇、屈曲徐斜、災国亡家、勢如才予、兵死刑因、勢如流水、生人皆鬼。」注⑯ (図六、七)

ここで、山に関する方法はその「勢」を見極めること、そして、「吉山」・「凶山」を見分ける具体的な標準も闡明された。

(3) 水について

「穴蚕在山、禍福在水。所以点穴之法、以水定之。山如婦、水如夫、如从天貴。如中原万里天山、取水断。夫石為山之骨、土為山之肉、水為山之血脈、草木為山之皮毛、皆血脈之貫通也。」注⑰

ここで叙べているのは水を見極める方法の重要性である。この思想は後に陽宅風水に大きな影響を与えて、「水龍」という理論を生み出した。

(4) 山と水との関係について

「山欲其疑、水欲其澄。山來水回、逼貴豊財、山止水流、膚王因侯、山頓水曲、子孫千億、山走水直、从人寄食、水過西東、財宝無究、三横四真、官職弥崇、九曲委蛇、准拟沙堤、重々交錯、扱品官資。」注⑱

要するに山と水の関係は調和するのが吉である。

第四節 唐宋の風水の二大流派

風水の歴史において、この時期は、風水の黄金時期といえる。『堪輿、名流列傳』に記載された有名な風水理論家では、秦1人、漢1人、晋3人、隋2人、唐33人、宋43人、元一人、明30人ということで、唐宋のが最も多く、そして、収編された風水著書も最も多い。しかも有名な著作に限らず、民間で流傳されていた風水書も氾濫するほど多かったと言う。そこで、呂才など十数人が、唐宋に任命され、流行している風水書を選択した。その結果、百冊の風水書が承認され、公開刊行できるようにされたが、実際には、その氾濫する潮流が衰える傾向は少しも見えなかったという。

盛んだっただけでなく、風水の歴史は、この時期に至り、流派が形成されるまでに発展してきた、という特徴も重視せねばならない。

そのうえ、今日においても研究者に最も注目されている、風水空間の構成の「桃花源的な防禦性」という特徴は、この時期に生まれたものである。これも重視すべきである。

唐宋の風水において、主に江南が盛んであり、江西と福建を中心とし、二大流派が形成されていた。

一 福建派

「一日屋宅之法始于濁中 至宋王伋乃大行其說主于星卦、陽山陽向、阻山阻向、純取五星八卦、以定生克之理。」注⑲

本格的な陽宅風水理論は、福建派からである。その代表的な人物は王伋といい、『堪輿名流列傳』に王氏に関する記載があるが、彼の著作に関する

記録はない。

方法論として、福建派は、主に、八卦、五行、十二支などの理論を基礎とした。これに関して最も詳しく説明してくれたのが、『黄帝宅経』であり、福建派の経典といえる著作である。

この理論の特徴について、すべて「陽宅図」に反映されている（図八）

1 八卦、十二支及び太極の理論に基づいて吉凶を判断することである。これは当時盛んな「宋名理学」の影響を受けたに違いない。特に周頤の「太極図説」の影響が大きかった。そこで、その時期から、陽宅風水理論は、基礎理論としての重点が、五行から、太極へ変化していた傾向が見られる。

2 「陽宅図」に表示されている方法は、漢代の「司南」（図九）と相似する。その「天門、地戸、鬼門、人門」という方法は、『吴越春秋』にも、これに関する注釈がある、「西北立龍飛異之樓、以象天門、東南伏漏石突、以象地戸。……是古以西北方天門、東南方地戸、西南方人門、東北方鬼門。」（図十）

この叙述が、福建派の理論には、かなり深い歴史根源があると教えてくれた。明清の「理派」は福建派の発展である。

二 江西派

この流派は主に陰宅風水に重点を置き、代表的な人物は楊筠松と彼の弟子曾文辿である。

唐朝にあって、楊氏は宮廷の風水師の役目を担い、金紫光禄大夫という高い官位を授けられた。戦争で、彼は、当時度州と呼ばれていた虔州府の一地方で風水師として、余生を過ごした。その時、本名より、救貧先生の名でよく知られていた。注②③彼は江西派の開祖とみなされている。

楊氏の著作は『疑龍経』と『撼龍経』である。『疑龍経』について、上篇は主に「水口」を論じ、中篇は主に向きを、下篇は「穴」、及び「籠」を論じている。『撼龍経』は主に山勢を論ずる。要するに、その理論の特徴は、山の形と水流の方向とに重点がおかれたということである。この理論

は、晋の郭璞の理論の影響を受けたが、郭の理論と違って八卦、十二支など理論に全く関連せず、そのうえ、山の形勢に関する十二の標準（十二杖法）（図十一）を作り出した。この意味では、明清の「形勢法」において、理論体系としては、その雛形を作り出した人物は楊氏であるといえる。

三 二大流派の異同

晋代、中原では戦争が起こり絶えず、戦乱を避けるために、都が江南に遷移された。戦乱という原因で、『桃花源記』注④に描かれた「防御性」的な居住環境（図二十）は、住宅に対する理想的なモードとなり、そして、風水の主な特徴となった。福建派にしても、江西派にしても、防禦的な環境は理想であると認識されている。福建派の「水口論」と江西派の「四霊論」ともその理想を実現するように作られた方法である。理論体系として、防禦的な風水理論が完成されたのは、明清時代であったから、第五節で、詳しく叙べよう。

福建派は、八卦・太極説に基づき、江西派は、山水の形勢に基づいている。方法は完全に異なる。魏晋時代、すでにこの二つの方法があったが、雛形だけで、流派までに形成されていなかった。福建派、太極説などの理論を受け継いだので、当然唐宋の自然科学の成果——僧一行の「磁偏角」などの理論を重視し、道具として羅経を利用するのが不可欠であるようになった。福建派は山水の形勢を余り重視しなかった。

江西派は、郭璞の『葬書』の形勢に関する部分を受け継ぎ、そのうえ、江南の山水の多いという特徴にむすびつき、実践した上で、その理論を作り出したのである。この流派は、太極などの方法も、そして羅経の利用も余り重視していなかった。

第五節 明清の陽宅風水の二大流派

この時期、風水が衰える傾向が見られない。この時期において、特に清の時期では、「考据風」が盛んで、その影響は風水思想にも及んでいた。

『四庫全書』、『古今圖書集成』に風水に関する理論が収録されている。そこで、新たな風水を作り

出すより、すでにあった風水理論を完璧に、体系化するのが重視されていた。

しかし、この時期の風水において、重視すべき点もあった。今までの風水では、墓あるいは住宅の位置だけに関心があることにかわって、住宅の内部構成に関する風水理論も作り出された。

日本の家相界に大きな影響を与えたのは、この明、清時代の風水を記した書であるといわれている。日本の家相では住宅の内部構成に重点が置かれている。この特徴の形成は、当然、日本の文化に原因があったが、明清時代におけるその変化にも関連があったのではないかと思う。これは、今後の課題である。

明清の風水において、主な位置に据えていたのは「理法」と「形法」である。

一 理法

この流派は、福建派からの発展であったので基本的にかわっていなかった。主な方法は八卦、太極などで、羅経の応用を重視していた。

この流派の理論に関する主な陽宅風水の著作は、『八宅周書』である。その理論の特徴は以下のようなものである。

(1)「八宅明鏡」

つまり、住宅の向きが八つに分かれ、その向きが主人の運命に関連されて、その住宅の吉凶を判断するという方法である。この理論では、「風水」だけではなく、住んでいる人の運命にもむすびつけて、住宅の凶吉を判断するのが特徴である。

(2)「陽宅の六事」と「陽宅の三要」

これは、先に叙べたような住宅の構造に関する理論である。「六事」とは、門、竈、井、道、厠、確磨であり、「三要」とは、主人、門、竈である。これらの要素が調和できたら吉を生じ、調和ができなかったら、凶を招ぐ。例えば、竈は厠に近づいてはいけないことなどである。風水史において、このような理論が生まれたのは、画期的な意義があるといえる。

二 形法

形法の理論。主な著作は、明の蔣平階の『水龍

経』、劉基の『堪輿漫興』と清の林牧の『陽宅会心集』、高見南の『相宅経纂』である。その理論をまとめて言えば、「観水、覧龍、察砂、点穴」である。

(1) 観水

観水について、最も重視した人物は、蔣平階である。

「山水方乾坤二大神器、後世言地知山之龍而不知水之龍、逐便平洋水局之地、傳会山龍之妄記。」注②

その時まで、山の形勢が重視されてはいなかったために、蔣氏が『水龍経』を書き出した。『水龍経』は十万字にのぼり、すべて観水に関する理論であり、大江から、河川、湖泊、そして小溪、池及び井まで、住宅に関連させ論じている。(図十二、十三)

①水の形について、原則では「屈曲、輕抱は吉であり、「直、斜飛、沖激、渦」という水勢は凶である。(図十四、十五、十六、十七)

②水源について

「南海長江、鴨緑江、黄河、四路水汪々界来、三幹分南北消息、機關在此藏。」注③

「北龍結地最方佳、万項山峰入望除鴨緑江黄河前 后抱金县、千古帝王家。」注④(図十六、十九)

要するに、川は大きければ大きいほど吉であり、小さな川なら、その源は大きな川にあったら、小吉といえる。

③水口

「凡水来所謂之点門、若不見源流謂天門開去処為地戸、不見水去謂之地戸閉。夫水本主財、門弁財来、戸閉財用之不竭。」注⑤

つまり、「水口で」は二つに分かれて、一つは水の入口であり、もう一つは出口である。いずれも、水が枯渇しないような役割ができたら、吉である。

水口について、最も重視すべき理論は、「入山観水口論」である。要するに、山に入る時にはまず水口を見きわめることである。そして、「水口不通舟」、すなわち、舟も通さないほどに狭い水口の必要があり、水口の両岸は断崖絶壁で、わず

かひとつの通りぬけることのできる山峽であることである。

(2) 覓龍

龍とは山脈である。これについての特徴は

「首尋視宗父母，審氣脈，別生死」注⑥

①「尋視宗」

「視宗」は「視山」ともいい、主な山脈を指し、主に崑崙山を指している。視山は、木の幹で、よい風水は木から生じた果実である。とにかく、視山からの支脈は吉である。

②「審氣脈，別生死」

つまり、山の形勢がかならず「環抱」していること、そして、山の起伏、高低、曲折していること、さらにひとつの環境の是非は、山の「環抱」が何層から成っているかを見る。そしてこれによって決定される。(図十八)

③「喝形」

「水口之山山形不齊龜蛇獅象綵云奇捍門華表清還貴史有羅星是福基。」注⑦

亀、蛇などが山の形を比喻する。いろいろな形を持っている山が、周りを圍繞し、そして、各種の動物が相互に育ち、それとも抑える関係があり、それらの動物に比喻されている山を調和していることである。

3 「察砂」

砂とは、大きな山の周りにある小さな山、あるいは丘であり、「帳幕」とも呼ばれている。

①主な山の周りに必ず砂があること、ないと、主な山が「孤独」であるので、凶である。

②砂と水との関係は重要で、水と同時に観察することが多い。(図十九)

③察砂四法。

「西旁鶴立命日待砂，能庶惡風，最有力縱龍擁抱命日衛砂，外御凹風内增氣勢。繞抱穴（前掲）命日迎砂。平低似揖拜恭之職面前特立命日朝砂，不論近遠特來方來・四砂惟朝關係匪輕……」注⑧

要するに、砂は四つに分かれており、待砂、衛砂、迎砂と朝砂である。それらの砂は、役割と位置が異なっているが、目的は同じで、気を収め、主な山を守ることである。

4 「点穴」

「穴」とは墓あるいは住宅がある場所であり、阻宅風水の場合は「明堂」とも呼ばれている。

穴も多種であり、正受穴、分受穴などといい、穴の位置と穴の形を指している。原則としては、①「明堂容万馬」、つまり、明堂には万匹もの馬を容すことができること、②龍の頭に禿り、龍の腕に生り、龍の尾及び爪を避けることである。

(3) 刑法についての小結

以上に叙べたように、陽宅風水の歴史において、明清の時代に至り、その理論の体系は完璧的といえるようになった。

この理論には二つの中心がある。一つは「氣」である。これは、晋の郭璞の『葬書』から受け継がれたものであり、すべての方法は「藏風聚氣」のためである。もう一つの中心は「防禦性」と考えられる。山の環抱、水口の狭さ、砂の守りなどという特徴がすべて防禦的である。唐宋以来、中国の古建築はほとんどが山腹、あるいは山の麓の中心に位置しているのが、防禦性の考えに原因があったと考えられる。

第六節 今後の課題について

一 風水とは

風水は、一種の文化現象として、二千年も経る過し、その間に宗教、巫俗、哲学及び自然科学などの他の文化現象にいろいろな意味で関連があった。したがって、重層性という特徴を持っている。

風水は巫俗から進展変化してきたものである。後漢から独立したが、巫俗の色彩はまだ残っている。そのうえ独立したと言っても、全般的・本質的にとらえた結果である。民間に流行している「非正宗」、非旁傳の数えきれないほど多くの風水術は含まれていない。それらの風水はまだ巫俗から離れていない。そこで、風水が巫俗だと思っている人がいる。

風水は、陰陽五行学、宋明理学などの哲学の影響も大きく受けた。風水の基礎理論は、哲学に源があると言える。そこで、風水は、哲学の色彩を充滿している。そのうえ、思想あるいは理論とし

て、完璧な龐大な体系を持っている。そこで、風水は哲学であるといっても無理ではないと思うくらいである。

風水は、儒教、道教などの宗教の影響を受けた。風水の主な特徴の一つ、住宅あるいは墓地の位置、その影響は現世だけでなく、来世の子孫にも及ぶというものは、道教にも原因があったと思われる。この意味では、風水には宗教の色彩もある。

風水はまた自然科学の成果も吸収した。例えば理法にとって羅経が不可欠な道具ということである。そのうえ、自然科学から見て、風水にも科学的な成分があることが確実である。例えば「近水向陽」という原則である。そこで、風水には科学性があると思われる。

風水とは一体何だろう。

今までの研究では、風水とは、重層性を持っている特別な文化現象としか言えない。すなわち、いろいろな成分を持っているが、どれも断言できないと思う。

余りにも特殊であるので、風水そのものの文化構造を解明するのが困難である。まず方法論を探究すべきであると思う。風水とは何だという問題について、いろいろな説ができ、哲学と主張され、自然科学と主張され、迷信と主張される。

風水を「科学」視することも、「迷信」視することも、結局はそれを合理的知識でのみ理解することである。つまり、風水を「迷信」とするのは、合理的知識ではどうも理解できず、対応できないからである。「科学」視したとしても、結局は「風水知識」の体系を分断して理解してしまうことになる。合理的知識では風水を解明するのに適用できないと思われる。風水書を読んでいる間に、どうしても理解できない部分が沢山あって、何度もわれわれの知識の習慣がじゃまになっているような感じがしていた。まさに渡辺欣雄氏に言われたとおりである——風水は、風水知識をもってのみ理解できると思われる。そこで一つの方法として、まず「風水知識」を「学習」すること、そのうえで、背景文化として、風水を産み、育った漢文化そのものの普遍的構造を深く理解すること、この

努力は、風水を理解するレベルに到達するまでしつづけたい。

しかし、われわれ中国人にとって、風水思想の研究とは、自民族の文化を研究することである。そこで、外国の方から見て不思議なことも、われわれから見たら“当たり前のこと”になる、ということはよくある。これも「知識の習慣のじゃま」注⑳になる。このじゃまを取り除くために、異文化を学習し、そのうえ、比較する方法しかない。異文化と比較すれば、今まで風水の見えない部分や測り知れない世界を含めた秩序体系が現れてくると思う。

風水との比較対象としては、日本の家相は最も適当である。家相において、風水の余流とする意味で風水と関連がある。そのうえ、「日本において、風水は風水として受容されなかった。」注㉑つまり、家相が文化複合の形で日本文化となった意味で、風水とは異なる、という理由からである。

したがって、家相を、そして家相の背景文化としての日本文化そのものの普遍的な構造を理解することが、この比較研究の前提となる。そして、このことは、これからの課題となる。

図一（『馬王堆漢墓』）

図二（『中国文化史より』）

図三『黄帝宅経』より

図四『青囊海角経』より

図五『青囊海角経』より

図六『青囊海角経』より

図七『青囊海角経』より

図八『黄帝宅経』より

図九『中国文化史』より

図十『青囊海角経』より

図十一『十二杖法』より

図十二『水龍経』より

図十三『水龍経』より

図十四『水龍経』より

図十五『水龍経』より

図十六『水龍経』より

図十七『水龍経』より

図十八『水龍経』より

図十九『水龍経』より
図二十 桃花源の防禦性

注

- ①『札記礼運』
- ②『管子一四』
- ③『鴻烈解三』
- ④『尚書, 周書, 洛浩』
- ⑤『史記』
- ⑥『詩経, 大雅』
- ⑦『易経』
- ⑧許慎の『淮南子・天文注』
- ⑨『漢書』
- ⑩『史記・樗里子甘茂列傳』
- ⑪『民俗縦書・堪輿篇』
- ⑫『後漢書』
- ⑬『三国史実魏書』
- ⑭『晋書卷七十二』
- ⑮『南史卷三十一』
- ⑯『葬書』
- ⑰『青囊海角経』
- ⑱『葬経』
- ⑲『陽宅会心集』
- ⑳『堪輿, 名流列傳』
- ㉑林は水の源に尽きて, 便ち一山得たり, 山に小
さきにあり, 髮髯として光あるが若し。便ち船
を捨てて口より入る。始めは極めて狭く, 纒か
に人を通ずるのみ。復た行くこと数十歩, 豁然
として開朗す。……』
- ㉒『水流経』
- ㉓『堪輿漫輿』
- ㉔『水龍経』
- ㉕『水龍経』
- ㉖『陽宅会心集』
- ㉗『堪輿漫輿』
- ㉘『博山篇』黄砂応
- ㉙『漢民族の風水知識と居住空間』渡辺欣雄
- ㉚渡辺欣雄

参考文献

- 「中国の風水思想」デ・ホロート著牧尾良海訳
「東南風水初探」何賤晰
「中国人の街づくり」郭中端・崛込憲
「表葬以観」宋徳胤
「中国春葬民俗」周芳平
「漢族の風水知識と居住空間」渡辺欣雄
「家相の科学」清家清
「民家・日本人の住居の知恵」杉本尚次

図一 風水の足跡

時代	称謂	段階	理論		人物	著作
上古	青鳥, 青鳥	起源	青鳥木, 青鳥木		青鳥子 青鳥氏	神話, 伝説
殷周	十宅, 相宅	維形段階	卜古木, 土圭法等		公列氏	『周易』
戦国 秦漢	堪輿	形成段階 (巫俗から離れ)	形法, 五行類		樽里子 青鳥先生 王充	『堪輿金匱』 『宮宅地経』 『青鳥先生の葬経』 『論衡』
魏晉	風水	発展段階 (流派形成傾向)	山水法	四霊説	管輅 郭璞	『葬書』
唐宋		黄金時代 (流派形成)	江西派	福建派	楊筒松 曾文迪	『疑龍経』 『撼龍経』 『黄帝宅経』
明清		完璧段階	形法	理法	蔣平階 劉基	『水龍経』 『堪輿漫輿』

図二

十二次	星紀	玄枵	姫皆	降娄	大梁	実沈	鶉首	鶉火	鶉尾	寿星	大火	析木
二十八宿	斗牛・女	虚危	室壁	奎・娄・胃	昂・毕	觜・参	井・鬼	柳・星・張	冀・杳	角・亢	氏・房・心	尾箕
十二辰	丑	子	亥	戌	酉	申	羊	午	巳	辰	卯	寅
分野	呉越	齐	衛	魯	趙	晋	秦	周	楚	郑	宋	燕
州	揚州	青州	并州	徐州	冀州	益州	雍州	三河州	荊州	豫州	豫州	幽州